

リカードにおける「比較優位の原理」と労働価値説¹

田 淵 太 一

- I 問題の所在
- II 「比較優位の原理」提示方法の相違
- III リカードがなぜ異なる提示方法を採用したか－労働価値説の問題
- IV むすびにかえて－理論史への示唆

I 問題の所在

「比較優位の原理」は、1816年10月にリカード（David Ricardo：1772–1823）によって発見された。「比較優位の原理」は全社会科学のなかで最重要の命題とみなされている（Samuelson 1969：683，訳357）にもかかわらず、リカードが用いた提示方法が現代経済学とはまったく異なるものであったために、「比較優位の原理」をめぐる理論史は奇妙な謎に包まれている。

リカードの原典²と現代のテキストブックにおける提示法の相違をめぐる主要な論点は、以下の3つである。

- 1) そもそも、リカードが用いた「比較優位の原理」の提示方法が、現代のテキストブックとは異なるということ自体がほとんど理解されていない。
- 2) リカードがなぜ異なる提示方法を採用したかについては、まったく理解されていない。
- 3) リカードが発見した「比較優位の原理」が、いつ誰によって変型され、現代のテキストブックのような提示方法に至ったかも従来、解明されてこなかった。

これら3つの論点の解明が前著（2006）第Ⅱ部（第3章～第5章）の課題であった。本稿では、前著において論述が不十分であった2)に重点をおいて論じよう。

1 本稿は、2009年11月17日に開催された同志社大学商学研究会における報告原稿に大幅な加筆修正を加えたものである。当日、熱心に議論に参加してくださった先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

2 リカードが「比較優位の原理」を論述したのは、『原理』第7章の2ページほどの箇所である。資料①の対訳を参照のこと。なお本稿では、リカードの貿易理論を「比較優位の原理」と呼ぶことにする。通例リカード貿易理論は、「比較生産費説（the theory of comparative costs）」と称されるが、リカード自身はこの用語を使用していない。他方、「比較優位（comparative advantage）」という用語をはじめて用いたのはリカードである。詳しくは、田淵（2006：201）を参照。

II 「比較優位の原理」提示方法の相違

まず、リカード『原理』における「比較優位の原理」の提示方法が現代のテキストブックとは異なる、という点について簡単に触れておこう。

現代のテキストブックでは、〈貿易前（アウトルキー）／貿易開始後〉という分析構図を想定し、「リカードの4つの魔法の数字」を労働投入係数（財1単位の生産に必要な労働）と捉え、「貿易パターンの決定」「交易条件の決定」「貿易利益の論証」という論点を重視する。

それにたいしてリカードの『原理』では、「貿易前」を想定せず、すでに行われている貿易を分析対象とし、交易条件は所与として「4つの数字」を「現実には交易される特定量の財の生産に必要な労働」と捉えた。「貿易パターンの決定」「交易条件の決定」「貿易利益の論証」という論点はほとんど無視されている。

1. 通常の解釈（現代のテキストブック、ヴァイナー、ハーバラー）

現在、事実上すべてのテキストブックが採用する「リカード・モデル」の標準的解釈とは、次のようなものである。

「4つの魔法の数字」は、2国2財モデルにおいて、各財1単位の生産に必要な労働量（労働投入係数）を示すと解釈される。両国それぞれにおいて、労働投入係数の比が、アウトルキー価格（貿易以前の国内相対価格ないし機会費用）を表わす。労働を唯一の生産要素とする一要素経済、および固定係数の仮定により、生産可能曲線は線型となり、貿易開始後、両国ともに完全特化という結果が生じる。交易条件は相対供給と相対需要により両国のアウトルキー価格の間で決定される。両国に必ず貿易利益が発生する（「大国」のケース、および交易条件がたまたま片方の国のアウトルキー価格に等しくなる場合を除く）。

学説史を追跡すると、こうした現代のテキストブックの解釈を確立したのは、1930年代に活躍したヴァイナーやハーバラーらの世代であることが判明する。

たとえば、以下のハーバラーからの引用部分は、「リカードの4つの数字」を労働投入係数と解釈した典型例である。

「イングランドでクロス1単位は100労働時間を要費し、ワイン1単位は120労働時間を要費する。ポルトガルでクロス1単位は90労働時間を要費し、ワイン1単位は80労働時間を要費する。……かくてポルトガルは両生産部門において絶対的優位を有するが、しかもこの優位はワインにおいてクロスにおけるよりも大である。すなわち、費用差異はクロスにおけるよりもワインにおいて比較的著しいから、ポルトガルはワイン

産するために100人を必要とするならば、『それゆえに、イングランドはワインを輸入しクロス輸出によって購入することが利益になると考えるだろう』。リカードはポルトガルについて続けて、ワインを生産するのに80人、クロスを生産するのに90人必要だとする。明らかにポルトガルは、X単位のワインを生産しこれをイングランドのY単位のクロスと交易すれば、10人を節約することになるであろう」(Ruffin 2002: 741-2)。

この解釈を数値例で示せば、資料②の第2表のようになる。なお、この数値例を現代のテキストブック流に労働投入係数表示に転換すれば、現代流の「比較優位の原理」提示法に整合することを示すこともできる(資料②の第3表)。

Ⅲ リカードがなぜ異なる提示方法を採用したか——労働価値説の問題

リカードが「比較優位の原理」提示にあたり、「貿易パターンの決定」「交易条件の決定」「貿易利益の論証」という現代貿易理論の重要論点をほとんど無視したのは、リカードがそれらを不十分にしか理解していなかったからではなく、第7章執筆の中心課題が別にあったからである。

別の課題とは、労働価値説が国内では成立するが、外国貿易では成立しないということ論証することである。そのために案出された理論が「比較優位の原理」であった。

1. 資料①の読解

パラグラフ [1] では、現実に行われている貿易を分析対象とするという論述から「比較優位の原理」の展開を開始する。

パラグラフ [2] では、労働量による交換比率の決定(すなわち、労働価値説)が国内では成立するが、外国貿易では成立していないという問題提起を行なう。素直に読めば、これがこの部分でのリカードの問題意識であることがわかる。

パラグラフ [3] では、イングランドはクロス生産に比較優位をもつことを2つの数字のみから説明する。交易条件は所与であるから、この記述が正確なのである。

パラグラフ [4] では、ポルトガルはワイン生産に比較優位をもつことを2つの数字のみから説明する。これも同様に解決済み。

パラグラフ [5] では、労働価値説が外国との間で成立しない(「イングランドは、80人の労働の生産物と交換に、100人の労働の生産物を与える」)のは、資本が国内は自由に移動するが、資本の国際移動が生じないことによると説明して問題を解決している。

パラグラフ [6] は、この箇所に付された脚注であるが、技術に絶対優位をもつイングランドでさえも穀物を輸入することがあり得るというリカード経済学全体にとって最重要の結論を導いている。この点を以下で詳述しよう。なお、脚注後半では「比較優位の原理」の計数的説明が付け加えられている。

2. D. リカードの主著『原理』の構成

ここで、リカードの短い生涯を通じた主要課題（穀物法廃止による自由貿易導入）と、『原理』における「比較優位の原理」提示の関係を把握するための準備として、『原理』の構成を検討しよう。『原理』は初版が1817年、第2版が1819年、第3版が1821年にそれぞれ発行された。リカードはその後1823年に急死している。

リカードの『原理』の原題は、

On the Principles of Political Economy, and Taxation

である。

原題に付されたカンマは意識的なものであり、『経済学および課税の原理』という通例の翻訳は誤っている。正しくは、『経済学の原理、および課税』と捉えるべきであろう。

こうした観点から『原理』の構成を考えれば、第1章～第7章が「経済学の原理」の部分すなわち理論篇に相当し、第8章以降が「課税」の部分に相当するとみることができる。

『原理』の目次

- 第1章 価値について
- 第2章 地代について
- 第3章 鉱山地代について
- 第4章 自然価格と市場価値について
- 第5章 賃銀について
- 第6章 利潤について
- 第7章 外国貿易について

第8章 租税について

以下、第18章まで租税の議論

第19～31 [32] 章は補論的な議論

第7章「外国貿易について」は理論篇の結論部分に相当する。なお、全集に収められた書簡を参照すれば、リカードは『原理』を章順どおりに執筆したということがわかる。

資料① リカード『原理』第7章「外国貿易について」における「比較優位の原理」の提示（対訳）

原文（Ricardo I: 134–6, 強調引用者）

[1] If Portugal had no commercial connexion with other countries, instead of employing a great part of her capital and industry in the production of wines, with which she purchases for her own use the cloth and hardware of other countries, she would be obliged to devote a part of that capital to the manufacture of those commodities, which she would thus obtain probably inferior in quality as well as quantity.

[2] **The** quantity of wine which she shall give in exchange for **the** cloth of England, is not determined by the respective quantities of labour devoted to the production of each, as it would be, if both commodities were manufactured in England, or both in Portugal.

[3] England may be so circumstanced, that to produce **the** cloth may require the labour of 100 men for one year ; and if she attempted to make **the** wine, it might require the labour of 120 men for the same time. England would **therefore** find it her interest to import wine, and to purchase it by the exportation of cloth.

[4] To produce **the** wine in Portugal, might require only the labour of 80 men for one year, and to produce **the** cloth in the same country, might require the labour of 90 men for the same time. It would **therefore** be advantageous for her to export wine in exchange for cloth. This exchange might even take place, notwithstanding that the commodity imported by Portugal could be produced there with less labour than in England. Though she could make the cloth with the labour of 90 men, she would import it from a country where it required the labour of 100 men to produce it, because it would be advantageous to her rather to employ her capital in the production of wine, for which she would obtain more cloth from England, than she could produce by diverting a portion of her capital from the cultivation of vines to the manufacture of cloth.

[5] Thus England would give the produce of the labour of 100 men, for the produce of the labour of 80. Such an exchange could not take place between the individuals of the same country. The labour of 100 Englishmen cannot be given for that of 80 Englishmen, but the produce of the labour of 100 Englishmen may be given for the produce of the labour of 80 Portuguese, 60 Russians, or 120 East Indians. The difference in this respect, between a single country and many, is easily accounted for, by considering the difficulty with which capital moves from one country to another, to seek a more profitable employment, and the activity with which it invariably passes from one province to another in the same country.*

[6] *It will appear then, that a country possessing very considerable advantages in machinery and skill, and which may therefore be enabled to manufacture commodities with much less labour than her neighbours, may, in return for such commodities, import a portion of the corn required for its consumption, even if its land were more fertile, and corn could be grown with less labour than in the country from which it was imported. Two men can both make shoes and hats, and one is superior to the other in both employments ; but in making hats, he can only exceed his competitor by one-fifth or 20 per cent ; and in making shoes he can excel him by one-third or 33 per cent. ; – will it not be for the interest of both, that the superior man should employ himself exclusively in making shoes, and the inferior man in making hats ?

訳文

[1] ポルトガルは現実にはワイン生産に自国の資本と労働の大きな割合を充てており、そのワインでもって外国産のクロスや金物類を購入しているのであるが、仮にポルトガルが諸外国と通商関係をもたないとすれば、この資本の一部をこれら諸商品の製造に充てざるをえず、こうして得られる諸商品はおそらく数量が少ないばかりでなく品質も劣るであろう。

[2] ポルトガルがイングランドのクロスと交換に与えるワインの数量は、各々の生産に充てられる労働量によって決定されるものではない。もし両商品がともにイングランドまたはポルトガルで製造されたなら、それぞれの労働量によって決定されるのであるが。

[3] イングランドが、クロスを生産するのに年間 100 人の労働を要し、もしワインを生産しようと企てれば年間 120 人の労働を要する、という事情におかれているものとしよう。それゆえにイングランドはワインを輸入し、それをクロスで輸出で購入することが自国の利益になると考えるであろう。

[4] ポルトガルでワインを生産するには年間 80 人の労働しか要せず、同国でクロスを生産するには年間 90 人の労働を要するとしよう。それゆえに、ポルトガルはクロスと交換にワインを輸出することが有利であろう。この交換は、たとえポルトガルが輸入するクロスが同国でイングランドよりも少ない労働で生産できるとしてもなお、行なわれるであろう。ポルトガルが 90 人の労働でクロスをつくることができても、それを生産するのに 100 人の労働を要する国から、それを輸入するであろう。なぜならば、ポルトガルにとってはむしろワインの生産に自国資本を使う方が有利だからであり、ワインと引き換えにイングランドからクロスを手に入れば、自国資本の一部をブドウの栽培からクロス製造に転用して生産可能になるクロスよりも、より多くクロスを手に入るとであろう。

[5] こうしてイングランドは、80 人の労働の生産物と交換に、100 人の労働の生産物を与えるであろう。このような交換は、同一国内の個人間では行なわれえないであろう。100 人のイングランド人の労働が 80 人のイングランド人の労働と交換に与えられることはありえないが、100 人のイングランド人の労働の生産物が、80 人のポルトガル人、60 人のロシア人、あるいは 120 人の東インド人の労働の生産物と交換に与えられることはありうる。単一国内と多数国間のこの相違は、次の事情を考察することで容易に説明できる。すなわち、資本がより高い利潤をもたらす用途を求めてある国から別の国へと移動するのは困難だが、同一国内のある地方から別の地方へと資本がつねに移動することは活発に行なわれているのである。*

[6] *こうしてみると、ある国が、機械と熟練について非常に優れ、したがって隣国よりもはるかに少ない労働で諸商品を製造しうるとしても、その国が、この諸商品と交換に、自国の消費に要する穀物の一部を輸入することがありうる、ということは明らかであろう。たとえその国のほうが穀物の輸入先となる国よりも、土地が肥沃で、少ない労働で穀物を栽培できるとしても、そうなのである。2 人の人間がいて、ともに靴も帽子も作れる。一方が両方の仕事で他方に優るとする。ただし一方の人が帽子製造で競争者に優る度合いがわずかに 5 分の 1 すなわち 20% であるのにたいし、靴製造の方では 3 分の 1 すなわち 33% 優っているとしよう。優れた方は靴製造に専従し、劣る方は帽子製造に専従するのが、両者の利益ではないか？

資料② 「リカードの4つの魔法の数字」にかんする誤解と正解

第1表 ヴァイナー (1937年)

財1単位の生産に必要な労働 Amount of labor required for producing a unit of		
	ワイン	クロス
ポルトガル	80	90
イングランド	120	100

出所：Viner (1937), p.445 の表を引用。

第2表 リカード『原理』第7章 (1817年)*

現実に交易される特定量の財の生産に必要な労働 (人/年)			
	X 単位のワイン	Y 単位のクロス	貿易利益
ポルトガル	80	90	10
イングランド	120	100	20

出所：Ricardo I, chap. 7 文中の数値より作成。

*リカードの提示法では、貿易利益はふたつの数字の引き算で簡単に求められる。

第3表 第2表を労働投入係数表示に改めたもの**

単位労働係数 = 財1単位の生産に必要な労働 (人/年)		
	ワイン	クロス
ポルトガル	80/X	90/Y
イングランド	120/X	100/Y

出所：第2表より作成。

**ポルトガルがワインに、イングランドがクロスに比較優位をもつための条件、すなわち $(80/X)/(90/Y) < (120/X)/(100/Y)$ が成り立つ。

3. 「比較優位の原理」発見（1816年10月半ば）に至る経緯

1815年に刊行されたパンフレット『穀物の低価格が資本の利潤に及ぼす影響についての試論』（以下、『利潤論』と略称。Ricardo IV）において、リカードは持論（ライフワーク）である「穀物法廃止による安価な穀物輸入」を主張した。しかし、この『利潤論』の時点では、『原理』で提示された「労働価値説」も「比較優位の原理」も触れられておらず、両者ともに未確立であったことがわかる。

労働価値説の確立は、1816年3月頃までになされた。リカードは1816年2月7日付のマルサス宛書簡ではじめて労働価値説に言及しており、そこにはこう記されている。

「相対価値または交換価値の根源および法則にたいして明瞭な洞察を与える仕方を妨げている障害を私が克服することができましたなら、戦いはなかば私の勝利となるでしょうが」（マルサス宛 1816年2月7日付，Ricardo, VII: 20）。

リカードはこうして確立した労働価値説にもとづいて、『原理』第1章～第6章を執筆したとみられる。

第6章「利潤について」でリカードは資本蓄積論を展開し、やがて穀物価格騰貴が賃金上昇・利潤減少をもたらして資本蓄積が停止状態に陥ることを論じた。リカードの問題意識のなかでは、続く第7章「外国貿易について」で持論の「安価な穀物輸入」による利潤率低下の阻止を主張すれば、理論篇が完結するはずであった。

ところが、リカードは1816年10月に入り、第7章にとりかかってからの2週間、執筆が停止してしまう。経済学史上最高の頭脳といってよいリカードにとって、2週間の停止というのは重大事件であった。

「昨今私は価格と価値の問題に足を奪われています。というのは、これらの諸点にかんする私の以前の考えは正確ではありませんでしたので。私の現在の見解も、以前の意見のすべてと矛盾する諸結論に導くところを見ますと、同様に間違っているのかもしれない」（マルサス宛 1816年10月5日付，Ricardo, VII: 71-2）。

1816年3月以降の労働価値説確立を経て、1816年10月初旬に第7章の執筆に向かったとき、リカードにとって問題だったのは、次の点である。すなわち、収穫逓減が作用するにしても、当時のイングランドは世界最高の農業生産性をすでに達成していたはずである。『利潤論』は、労働価値説確立以前の時期に執筆されたため、穀物法廃止がただちに安価な穀物輸入に道を開くとの持論を、何ら矛盾を感じることなく展開しえた。ところが、労働価値説を確立したうえで、しかもイングランドの農業が世界最高の絶対的生産力を誇りつつも安価な穀物輸入が可能であると主張することは理論的難問であった。これが、リカードを2週間悩ませた難問であり、「比較優位の原理」の発見によって克服された問題なのである（資料②パラグラフ [6] 前半を再読せよ）。

1816年10月14日付ジェームズ・ミル宛書簡で「比較優位の原理」の発見によって

難問が解決し、引き続き第8章の課税にとりかかることを報告した。

「私は価格の法則 (the law of price) を見出すためにけたはずれに頭を悩ませて (beyond measure puzzled) きました。私は数字に相談してみて私の以前の見解が正しいはずがないことを発見し、私の困難を解決する仕方がわかるまでにたっぷり2週間もそれについて考え抜きました。その間は先へ進むことができませんでしたが、そうでなければ私の仕事はもっとはかどっていたはずです。私はこれから課税の問題を、理論の一貫した展開になるように、まず手はじめに紙のうえで考えてみましょう」(Ricardo, VII: 84)。

ここで浮かび上がる重要な史実とは、リカードの「比較優位の原理」が、労働価値説の部分的否定のための理論であった、という点である。リカードは、労働価値説が成立しない国際貿易の場面を持論と矛盾なく説明するために、「比較優位の原理」を考案したのであった。

IV むすびにかえて——理論史への示唆

貿易理論を学ぶほぼ全員がテキストブックで「比較優位の原理」を学ぶため、現在もなお、リカードによる提示法の意義は見失われている。

リカードの独自の提示法に気づいた数少ない理論家(行沢と Ruffin)は、リカードのユニークな提示法が失われた責任を J. S. ミル (Mill 1848) に負わせる。ミルは、「相互需要」による交易条件決定理論を提起するために、「貿易前」の想定と労働投入係数表示の「4つの数字」を導入した張本人であるとされる。

しかしながら、J. S. ミルはリカード理論を誤解して解釈をねじ曲げたのではなく、リカードに欠如していた交易条件決定理論⁴を補完するために意識的にリカード理論を変型・拡張したのであって、「曲解」の責任を負わせるのは不合理である。

「曲解」の責任はむしろ、現代のテキストブックの直接の土台を確立したヴァイナーやハーバラーらの世代にある。

ヴァイナーやハーバラーらの理論は、「二重の誤解」にもとづいていた。

- 1) J. S. ミルが行なった意識的変型プロセスを見抜けず、J. S. ミルの理論をリカードのそれと同一視した。
- 2) しかも、「比較優位の原理」と労働価値説がリカードにおいて結びついていたと

4 リカードは、1820年頃に執筆した『マルサス評注』のなかで、交易条件の決定要因に自らの理解が及んでいないことを率直に認めてこう述べた。「もし一国が外国の必需品と便宜品に一定の貨幣価格を支払うなら、その国が輸出する商品を低い価格よりもむしろ高い価格で売るほうが利益になるということは、疑いもなく正しい。一定量の自国商品にたいし、その見返りに、少量の外国産商品よりもむしろ多量の外国産商品を受け取るほうが望ましいことである。しかし一国がどのようにその力を行使すればこのことを達成できるのか、私にはまったく考えが及ばない」(Ricardo, II: 146)。

捉え、「比較優位の原理」から労働価値説を排除し、自らが信奉する別個の価値理論⁵に置き換えることを自らの理論的課題とした。

1930年代以降、ヴァイナーとハーバラーのあいだで不毛な論争が行われた末、両者が折衷された理論がサムエルソンによって現代のテキストブックの内容となった（詳しい経緯は、田淵 2006 第5章を参照）。

他方、リカードが確立した労働価値説はリカード急死後すぐに主流の経済学から消失した（リカード自身、労働価値説確立後半年にして外国貿易という重大な限界に直面した）。

労働価値説をリカードから継承した主要な理論家はマルクスのみであったが、マルクスが外国貿易の理論的研究に取り組んだ形跡はほとんど皆無である。

マルクス派の研究者は、労働価値説を国際貿易に拡張すべく、「国際価値論争」を展開した。この論争は、J. S. ミルが「比較優位の原理」を土台にして交易条件決定のために需要・供給価値説を展開したのに対抗して、これを労働価値説に置き換えようとする試みというべきものであって、ヴァイナー、ハーバラーと同様の誤解にもとづいていたと言ってよい。

参考文献

- Chipman, J. S. (1965) "A Survey of the Theory of International Trade Part 1: The Classical Theory," *Econometrica*, Vol.33, No. 3, July.
- Haberler, Gottfried (1933) *Der Internationale Handel*, Berlin: Verlag von Julius Springer. (G. ハーバラー著, 松井清・岡倉伯士訳『国際貿易論』有斐閣, 1937年)。
- Mill, John Stuart (1848) *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted in 1973, New York: Augustus M. Kelley. (J・S・ミル著, 末永茂喜訳『経済学原理 (1)~(5)』, 岩波文庫)。
- Ricardo, David (1951-73) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols., edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, Cambridge: Cambridge University Press. (D. リカードウ著, P. スラッファ編, M. ドップ協力, 堀経夫ほか訳『デイヴィッド・リカードウ全集 I~XI』雄松堂書店, 1969-99年)
- Ruffin, Roy J. (2002) "David Ricardo's Discovery of Comparative Advantage," *History of Political Economy*, Vol.34, No.4, Winter.
- Samuelson, Paul (1969) "The Way of an Economist," in Paul A. Samuelson ed., *International Economic Relations*, London: Macmillan, reprinted in Robert C. Merton ed., *The Collected Scientific Papers of Paul A. Samuelson*, Vol. III, Cambridge, MA.: The MIT Press, 1972. (塩野谷祐一ほか訳『サムエルソン経済学大系第9巻 リカード, マルクス, ケインズ……』勁草書房, 1979年)。
- Sraffa, Piero (1930) "An Alleged Correction of Ricardo," *Quarterly Journal of Economics*, Vol.44.
- 田淵太一 (2006) 『貿易・貨幣・権力 - 国際経済学批判』法政大学出版局。
- Viner, Jacob (1937) *Studies in the Theory of International Trade*, reprinted in 1955, London: George Allen & Unwin.
- 行沢健三 (1974) 「リカードウ『比較生産費説』の原型理解と変型理解」『商学論纂』(中央大学) 第15巻第6号。

5 ヴァイナーは「実質費用価値説」を、ハーバラーは「機会費用価値説」を労働価値説と置き換えるべき正しい理論と考えていた。